

タイトル	小型捕鯨の文化人類学的考察(1)：網走捕鯨共同体のケース
著者	岩崎，まさみ
引用	北海学園大学人文論集，23・24：1-33
発行日	2003-03-31

小型捕鯨の文化人類学的考察(1)： 網走捕鯨共同体のケース¹

岩 崎 まさみ

父親の商売を引き継いで捕鯨をやっていますが、昔は船にのっていました。
その頃が懐かしくって。陸で仕事をしているより、海で鯨を追っかけてい
る方がいいね。

第八高島丸故三好船主

1. はじめに

国際捕鯨委員会が商業捕鯨全面禁止（モラトリウム）を決定したのは1982年のことであった。その決定に対して日本政府は異議申し立てを行ったものの、後にそれを撤回し、実質的には1986年の沿岸小型捕鯨漁期を最後に、日本の小型捕鯨は捕獲枠の大部分であったミンククジラの捕獲枠を失った。その後、操業の合理化等の対策を取りつつも、ミンククジラを除いたツチクジラなどの小型鯨類の捕獲を中心とした操業を続けつつ、現在に至っている。日本政府は国際捕鯨委員会において、小型捕鯨が他国の先

1 本論文は筆者が1986年以来、アルバータ大学人類学部大学院修士課程に在学中に修士論文を書く目的で行った聞き取り調査、及びその後国際捕鯨委員会へ提出する書類作成のために行った聞き取り調査の結果をまとめたものである。英文ではその一部を修士論文として発表した(*Cultural Significance of Whaling in a Whaling Community in Abashiri*, 1988)。

2 国際捕鯨委員会における“Aboriginal/Subsistence Whaling”を、日本政府は「原住民・生存捕鯨」と訳しているが、筆者は、「先住民・生業捕鯨」という日本語訳を用いる。

住民捕鯨者に許されている先住民・生業捕鯨²と同様に、捕鯨地域において社会・文化的に重要な役割を果たしている事を重ねて訴えてきたものの(日本政府 1997)、その理解はまだ得られていない。

網走沖で小型捕鯨船がミンククジラを最後に捕獲してから、早くも16年の月日が流れ、一般には当時の記憶が薄れつつあるもの、網走においてミンククジラ漁の再開を求める声は高い(フィールドノート 2002)。2002年には第54回国際捕鯨委員会が下関において開催され、報道等を通して捕鯨問題に再び焦点が当てられたこと。また、2002年夏には北太平洋海域でのミンククジラ資源調査が行われ、その副産物である鯨肉が地域に流通したことなどにより、網走地域の捕鯨のともし火は再燃している。これらの変化を背景に、モラトリウム以前に小型捕鯨が地域社会において果たしていた役割を、再確認する事の意義は大きい。本稿では北海道における捕鯨の歴史の概略、1980年代の網走地方における小型捕鯨の状況の検証をとおして、モラトリウム以前の網走における小型捕鯨の文化人類学的考察を行う。

2. 北海道における捕鯨の歴史的背景

北海道の歴史を理解するには、北海道に源を持つ文化と本州・九州から伝播した文化のいずれにも注目する必要がある。縄文期から続く北海道の歴史に加えて、19世紀の北海道開拓期に本州地方から北海道へ移住した人々は、その後の北海道の発展に大きな影響を及ぼした。これらの人々は本州地方で発達した技術を北海道へ導入し、しだいにこの地域における近代化を先導していった。これらの歴史的経緯により、北海道において「伝統文化」という言葉は二つの意味を持つ。そのひとつの意味は、北海道において発生した「伝統文化」、特にアイヌの人々の間に育った文化である。もうひとつの意味は北海道以南において発達し、後に北海道へ伝わった伝統文化を意味している。ゆえに北海道の歴史を語る時、これらの二つのいずれもが重要であり、それらの両方の伝統文化を理解する事が不可欠である。

捕鯨の歴史を見る上でも、二つの伝統文化を捉える必要があり、ここで

は北海道の人々、特にアイヌ民族による捕鯨およびクジラ利用の伝統を北方捕鯨とし、一方本州、九州、四国など北海道以外の地域で発達し北海道に伝播された捕鯨を南方捕鯨と呼び、その両方を検証する。さらにその後大正時代になり、ノルウェーで開発された捕鯨砲を用いた近代捕鯨技術が北海道へ伝えられたことにより、北海道においても近代捕鯨が始まった。本章では北海道における捕鯨の伝統の変遷を「北方捕鯨の伝統」「南方捕鯨の伝統」「近代捕鯨のはじまり」の3期に分けて検証する。

1) 北方捕鯨の伝統

北海道における北方捕鯨の伝統の原型はいくつかの考古学調査により明らかにされてきた。その中でも、縄文時代の遺跡において発掘された考古学資料は、クジラの利用を示す最も古い資料とされている（西本 1985；宇田川 1979 a）。北海道の各地の縄文時代の貝塚から、他の動物の骨と混ざってクジラの骨がしばしば発掘されているが、それは縄文時代における宗教儀礼の跡と言われている。その一例が、釧路地方で発掘された放射状に並べられたイルカの頭蓋である。またクジラ資源が豊富な地域である噴火湾地域の縄文時代の遺跡から、クジラの下顎が発掘されている。さらに神恵内の縄文時代の遺跡では、加工痕のある鯨の骨が発掘されている。これらのことから、北海道におけるクジラ利用文化は、縄文時代までさかのぼることが出来る（秋道 1994）。

オホーツク文化時代の人々は11世紀頃まで北海道の北東地域に住んでいた狩猟民と考えられ、この時代のいくつかの遺跡から、石や動物の骨や角などを用いた道具が発見され、オホーツク文化人はそれらを用いて漁労や海獣漁を行っていたと考えられている（大井 1982）。それらの道具の中にはクジラの骨で出来た銚先、臼、鋏などがある。このことからオホーツク文化人はクジラ資源を広範囲に利用していた事が明らかである（宇田川 1979 b；米村 1981）。さらにこれらの遺物に加え、当時の人々がクジラを捕っている様子を彫った針入れが北海道東部の遺跡で発掘されている（大井 1982）。

北方捕鯨の伝統の中で注目すべき時期は、アイヌ捕鯨の時代である³。名取(1940)が残した噴火湾地方のアイヌによる捕鯨に関する記述は有名である。名取はこの地域で自ら2頭のクジラを捕った事のあるアイヌの古老に聞き取りをして、以下のように記述している：

鯨を突くのは、沖漁のはじめ5月頃だが、最初から鯨を目当てに出る訳ではない。他の魚や海獣を突いていて、鯨が近いところに浮かび上がると、毒の付いたハナレ〔鉈〕を投げるのだ。

(名取 1940:40)

アイヌによる捕鯨の詳細な記述は、名取のこの論文だけであることから、アイヌが捕鯨を行った事実を伝える貴重な文献である。名取はこの論文の中でアイヌの人々が持っていた捕鯨やクジラに関わる様々な知識や儀礼について報告している。

名取と同様にアイヌ民族の捕鯨について調査を行った更科は、上記の捕鯨方法の他に、槍に毒を詰め込んでクジラに打ち込み、クジラが弱って浜に打ちあがるのを待つという方法を紹介している(更科 1955;1976;岩崎 2002)。アイヌ民族が利用したと言われている「寄り鯨」は、受身的に鯨が寄りあがってくるのを待つ形態の他に、より積極的に鯨を寄せてくるという方法があったと考えられる。その他のアイヌの捕鯨に関する記述は、様々な文献に分散的に見られるが、最近になりそれらの記述を秋道(1994)渡部(1992;1993;1994a;1994b;1995), Iwasaki-Goodman and Nomoto (1999), 岩崎・野本・藤島(2000), 岩崎(2002)がまとめている。

アイヌとクジラの関わりの深さはアイヌ語でクジラを意味する「フンベ」という言葉が、北海道の各地で地名として使われている事からも明らかで

3 アイヌのクジラ利用文化に関してはIwasaki-Goodman & Nomoto (1999), 岩崎・野本・藤島(2000) 岩崎(2002)などが詳細に書いていることから、本論文では最小限に留める。

ある(山田 1984)。これらの地名はクジラが見えるところ、あるいはクジラが寄りあがる所を指している場合が多い。またアイヌの人々の日常表現にも「フンベ」が使われている。その例として萱野(1980)は、家を出る前に針を使わなければならない時のまじないを上げている：

海辺で鯨が寄りあがったという話なので、そこへ走っていこうと思って入り口まで出たら、入り口の萱押さえ柴にひっかかって着物にほころびができたので縫うのです。

(萱野 1980：153)

アイヌの人々は針に糸を通したあとに、このおまじないを唱えると災いを逃れることが出来ると考えた。その他にアイヌ民話や遊びにはクジラを比喩的に表現したものが出てくる。その中でも、クジラが浜に寄りあがる事を願って踊ったと言われている「寄りクジラの踊り」は、地域的な多様性を持ちつつ、現在も伝承されている。

アイヌ民族によりクジラ利用文化は北海道各地に幕府の管理が及ぶにつれて、次第に制限されていった(岩崎 2002)。幕府が捕鯨を奨励した噴火湾および函館地域では、アイヌの人々による捕鯨が継続されていくが、明治期に毒の使用が禁止されることによって、積極的なクジラの捕獲手段は失われ、その後は「寄りクジラ」を中心としたクジラ利用文化が継承されてきた。

2) 南方捕鯨の伝播

北海道以南で発達した捕鯨技術が北海道へ伝播され始めたのは明治期以前であった。この時期に、幕府が北方の警備と捕鯨操業海域の拡大という二つの目的から、北海道において捕鯨事業を起こそうとしたという記録がある(福山 1943；金成 1983；北水協会 1984；板橋 1989)。当時、外国捕鯨船による日本近海での捕鯨活動により、日本の捕鯨業と国の治安が脅かされていた。幕府は警備を強め、日本の自衛力を強化する必要に迫ら

れていた。そのような状況の中で、北海道はクジラ資源が豊かな海に囲まれていることから、多くの外国船が集まり、ゆえに外国船による攻撃に対して十分な警備が必要とされていると判断された。そこで高度の航海術と熟練した集団労働技術を身につけた鯨捕りが、最も優秀な兵士として注目された。同時に伝統的に捕鯨が行われていた地域では、外国の捕鯨船による過度な捕鯨活動が原因で、クジラ資源は減少し、その結果日本の捕鯨業が困窮していた事などから、新しい捕鯨操業海域の開拓は強く求められていた。

幕府は北海道において捕鯨業を起こす試みのひとつとして、房総半島にある伝統捕鯨の村である勝山の鯨組を北海道へ派遣した(福山 1934; 板橋 1989)。その命を受けた醍醐家は、1802年に5代目定昌一行を北海道の地へ送り込み、捕鯨に適した海域を探した。その後、7代目定継一行は1857年に北海道を訪れ、このときに定継一行がアイヌの人々の捕鯨の様子を「蝦夷人の突棒捕鯨の幼稚さ」と記述している(福山 1934: 112)。さらに1863年には8代目により最後の捕鯨開拓が行われた。

醍醐家の北海道における捕鯨漁場の開拓に前後して、北海道南部の函館では、中浜万次郎が北海道への捕鯨導入を試みていた(金成 1983)。中浜はアメリカの捕鯨船で働いた経験をかわれて、1862年にアメリカ式捕鯨技術の指導のために、函館へ送られた。1866年、函館奉行は地元の捕鯨見習い志願者に対し、函館港へ入港する外国からの捕鯨船において捕鯨技術の指導を受けるように布達した記録がある(北海道庁 1957)。しかし明治期以前に行われたこれらの捕鯨技術導入の試みは成功を収めることが出来なかったが、後の北海道捕鯨の確立の礎となった事は確かである。

明治時代には多くの野望に満ちた冒険者が、北海道での捕鯨開拓のために活躍した。北水協会百年史(1984)には1887年頃(明治20年頃)に、難破したアメリカの捕鯨船を使い捕鯨を試みた柳田、鈴木という根室の男の記録がある。興味深い事には、和歌山、土佐、九州に源を発する網捕り式捕鯨が、その当時北海道でも行われた事である。明治時代初期に最初に北海道へ網とり捕鯨を導入しようと試みたのは、本州の山口藩の者であっ

たが、これらの捕鯨者は3年の内に引き上げてしまった(北水協会 1977)。その後1887年(明治20年)、石川県の武士、斉藤知一が北海道の北部で捕鯨業を起こそうとして移住してきた(中村 1985；板橋 1989)。最初は思いうような成功を収めなかったが、1889年(明治22年)に斉藤はその一年前に創立した大日本帝国水産会社の捕鯨部門の責任者に命じられた。大日本帝国水産会社は最初ラッコ漁を中心とした水産会社であったが、斉藤が加わったことにより捕鯨業へと事業を広げていった。

北海道の羽幌・天塩地域で行われた特有な網捕り捕鯨の詳細は、斉藤知一の自叙伝の中で説明されている。

先ず網を張る。それが鯨の頭にひっかかると逃げるでしょう。そうすると網がところどころ切れるようになっていて、鯨は網をかぶったままの状態で逃げ回る。そこで船は鯨の体すれすれに近づいて、銛を撃つ。手投げだよ。すかさず船に積んである土俵を海中に投げ入れる。土俵の中にはバラスが詰めてあって、これを網で船べりから吊るすようになっている。それをバランスを計りながら手際よく10俵、15俵と海中に下げると船に重み加わってくる……2の槍、3の槍というふうに銛を撃つのだ。

(中村 1985：60)

網捕り式捕鯨は天塩と北見を基地として、明治時代の終わりまで続けられた(中村 1985)。本州・九州・四国において捕鯨業が衰退していった明治期の初頭に、斉藤知一や大日本帝国水産会社などにより、網捕り捕鯨を継続させる努力がなされ、その目的にかなう土地として、これらの場所が選ばれた。しかし北海道沿岸のクジラ資源が外国船の捕鯨活動により減少してしまったために、1900年代(明治30年代)には北海道における伝統的網捕り捕鯨は終わりを迎える事となった。これは同時に日本の網捕り捕鯨の伝統の終わりでもあった。

明治期の終わりに、後の東洋捕鯨株式会社の取締役社長である岡十郎は

ノルウェー式捕鯨法を導入する事により、日本に新しい捕鯨時代の始まりをもたらした(明石 1910; 中村 1985; 板橋 1989; 森田 1994)。銛を大砲に取り付けて打つノルウェー式捕鯨⁴を学び日本へ持ち帰った岡は、1909年に日本遠洋漁業を設立し捕鯨業を始めた。最初は山口県で操業を行ったが、後に千島、そして北海道へと進出して行った。ここで再び斉藤知一が北海道の捕鯨舞台へ引き戻され、後の東洋捕鯨である大日本水産を任されることになった。

北海道における南方捕鯨伝統の影響は、言うまでもなく、重要である。捕鯨技術の伝播により、北海道の漁民は新たな漁業の道を与えられたばかりでなく、明治期に捕鯨に親しんだ北海道の人々は、次の時代の近代捕鯨技術導入にいち早く取り組み、近代捕鯨へと参入していくことができた。さらに明治期の網捕り捕鯨の伝播は、南方で発展した捕鯨の伝統が北海道に継承され、その最終章を北の海で迎えたことから、日本の捕鯨史の上でも、意味深いと言える。

3) 近代捕鯨のはじまり

北海道の近代捕鯨の歴史は大正時代の始めに、本州に本社を持つ捕鯨会社が北海道に捕鯨基地を設け、沿岸大型捕鯨を始めた頃から始まる(網走市 1971; 板橋 1989)。これらの捕鯨会社はいちはやくノルウェー式捕鯨法を取り入れ、北海道沿岸海域においてナガスクジラ、ザトウクジラ、イワシクジラ、マッコウクジラなどの大型鯨類を捕獲した。この時期の北海道捕鯨全般に関して、板橋(1989)が詳細に記述していることから、ここでは本論文の主題に関わる網走地域の近代捕鯨に限定して検証し、特に小型捕鯨との関連で重要である部分を記述するにとどめる。

4 近代捕鯨の父と呼ばれるノルウェーのスヴェンド・フォインによって開発された新しい捕鯨技術であり、大砲を用いて捕鯨銛をクジラに打ち込み、捕鯨銛に結びつけられたロープを巻き取ることにより、効率よくクジラを捕獲することが可能になった(明石 1910; 森田 1984)。

大正時代と昭和初期にかけて、東京に本社を持ついくつもの捕鯨会社⁵が、沿岸のクジラ資源を求めて網走地域に捕鯨基地を設けた。これが網走地域における近代捕鯨のはじまりであり、この頃に、後に続く捕鯨の町としての歴史が始まったと言える。この当時の網走の様子を語る資料である「捕鯨業の沿革」（網走市 1971）には、捕鯨が町の活力となっていた事が記されている：

オホーツク海には鯨の回遊が多く、汐をふいて沖合を郡遊する状況が沿岸からも望見される程であり、また死鯨が漂着して浜を賑わしたこともしばしばであった……とくにその豪快な解体作業には見物客は押し寄せ、絵葉書まで発売されるありさまであった。

（網走市 1971：911）

地理的に不便であるという理由から、一時的に捕鯨基地が閉鎖された時期があったものの、1931年（昭和6年）になり、東洋捕鯨は再度網走にもどり、より便利な場所に捕鯨基地を建てた。このとき東洋捕鯨は日本捕鯨と名称を変更した。数年の空白はあったものの、日本捕鯨は再び活発に網走沖での捕鯨を始めた。その後東京に本社を持つ別の捕鯨会社である土佐捕鯨が、高まるクジラ肉・脂の需要にこたえるため網走に捕鯨基地を設けた。

第二次世界大戦中の食糧難が深刻になった1945年頃（昭和20年頃）には、大型捕鯨会社が大型鯨類の他に、小型の船を用いてミンククジラの捕獲を始めた。これらの小型の捕鯨船は7隻を数えた。1953年（昭和28年）頃には、地元の漁業者が捕鯨会社からこれらの船を買い取り、その船を用

5 これらの捕鯨業は、沿岸で大型のクジラ類を捕獲することから、大型捕鯨業と呼ばれている。一方、沿岸においてミンククジラのような小型鯨類を捕獲する捕鯨業は小型捕鯨業と呼ばれている。この区分は「指定漁業の許可及び取り締まり等に関する省令」に定められている。

いて独自に小型捕鯨業を始めた。それまでは網走に捕鯨基地がありながらも、地元の会社ではなく、東京に本社を持つ捕鯨会社が網走の地を借りて捕鯨を行っていたが、網走の漁業者がそれぞれ1隻の「ミンク船」を買取り、2つの小型捕鯨会社を設立したことにより、地域に根ざした新たな捕鯨が生まれた。さらに鯨肉と鯨脂は地域の人々にとり重要な食料源であり、小型捕鯨業は地元の需要にこたえるという重要な役割を果たした。小型捕鯨が益々深く地域に根付き発展して行く一方、1950年代には大型鯨類の捕獲量の激減に苦しんだ末に、大型捕鯨基地は閉鎖された。興味深いことに、1958年に発行された網走地域の観光ガイドブックでは、網走市を小型捕鯨の町として紹介している。

港の方からボーという警笛が響いている。やや間をおいて2度、3度。この警笛が聞こえ始めると、網走の人たちは期せずして働く手を休め、幾度なるのかと耳をすませて鳴り止むまで待っている……女たちは胸の中で今晚のおかずは鯨の肉にしようかと考える……警笛の聞こえた日の夕方、網走市街の南端に近い捕鯨会社を訪れると、裸体の男たちが、大きななぎなたのような柄の長い刀を振るって、鯨の巨体をたちまち処理してゆく手際を見学することができる。鯨をさばく男たちでいっぱいになる。

(河野 1958:90)

大正・昭和期になり捕鯨砲を用いた近代捕鯨技術の導入により、北海道において捕鯨を始めようとした人々の努力がついに実った。北海道沿岸地域の捕鯨は大型捕鯨会社によって開拓され、その後、地元の人々により地域型の小型捕鯨業に受け継がれていった。捕鯨は第二次世界大戦後の食糧難の時代には地域の人々だけではなく、北海道全域の人々の食生活の向上に貢献した。小型捕鯨業は1980年代に至るまで、安定した操業を続けたが、1987年の「商業捕鯨全面禁止」によってミンククジラの捕獲枠を突然失った。

3. 網走市の概況

北海道の東端に位置する網走市は漁業の町として知られている。オホーツク海の豊富な海洋資源に恵まれ、1987年頃の網走市の人口は1987年に43,082人（北海道年鑑 1987）であった。その頃の漁業センサス（北海道庁 1985）によると、網走市には508人の漁業従事者が登録され、それらの人々は遠洋底曳き漁、流し網漁、定置網漁などを行っている。その人口の内訳は以下の通りである。

表1 1985年頃の網走における漁業従業者数 (単位：人)

母船式さけ・ます	1	釣	11
北洋はえなわ及び刺し網	1	はえなわ	21
近海捕鯨	18	定置網	98
援用底引き網	9	採貝	15
以西底引き網	1	採藻	9
沖合底引き網	199	その他の漁業	31
まき網	2	養殖（ほたて）	10
さんま棒受網	3	内水面漁業	8
刺し網	71	合 計	508

(北海道庁 1985：248)

網走近海では多種の漁業とならび小型捕鯨が行われ、18人の専業捕鯨者が2隻の船で操業している。小型捕鯨はミンククジラを主に捕獲していることから、地域の人々はこれらの2隻の船を「ミンク船」という愛称で呼んでいる。第二次世界大戦中および戦後には食料不足の解消のために、北海道の他の地域にも大型捕鯨会社の捕鯨基地が設けられ、そこを本拠地として捕鯨が行われていた。しかし国際捕鯨委員会が大型鯨類の年間捕獲枠を縮小していくに従い、捕鯨業が衰退し多くの捕鯨基地は閉鎖された。1986年当時、北海道において捕鯨が続けられていたのは網走市だけである（北海道庁 1985）。

小型捕鯨は1947年（昭和22年）以来、農林大臣の許可のもとで操業を

行う許可漁業である(多藤 1985)。水産庁により、操業に関する様々な規制、指導、及び監督が行われ⁶、さらにミンククジラの捕獲枠は国際捕鯨委員会が決定する。許可制度になった当時は、全国で75隻の許可船があったが、その後次々に減少し、1986年には網走の他に千葉県和田浦町、宮城県牡鹿町、和歌山県太地町の合計4カ所に9隻の許可船があるのみである。これらの船を所有する8つの小型捕鯨業者は全国規模の協会を設立し、年間の操業計画を立てて、協力的な操業体制をとっている。クジラの捕獲枠は小型捕鯨協会のメンバーの間で分配され、各船に捕獲枠を割り当て、また海域ごとに漁期を設定するなど、水産庁の指導のもとで操業している⁷。「商業捕鯨全面禁止」以前、小型捕鯨の主なる捕獲対象であるミンククジラの捕獲枠は年間平均350頭程である(小型捕鯨協会 2002)。

4. 小型捕鯨共同体

多種の漁業が営まれている網走において、小型捕鯨業に従事する人々は、捕鯨作業から派生する複雑な社会・文化・経済的つながりによって結ばれている(表2参照)。その中心を構成しているのが、クジラの捕獲作業を行う核捕鯨者集団である。核捕鯨者集団は親方(船主)に加えて、砲手、船長、機関士、甲板長、甲板員(3人)、まかないの8人の乗組員により構成されている。北部ノルウェーの小型捕鯨業者のように、他の漁業と兼業して捕鯨を行うのではなく(岩崎 1997)、網走の小型捕鯨業者は捕鯨専従者である。

6 「指定漁業の許可及び取り締まり等に関する省令」(平成14年7月25日農林水産省令(代)6号)の第7節において、小型捕鯨業の操業時期等に関する操業規制の詳細が定められている。

7 9隻の船を総合した小型捕鯨業の文化人類学的分析についてはフリーマン、他(1989)やIwasaki-Goodman & Freeman (1994)が報告している。またIwasaki-Goodman (2000)は宮城県牡鹿町の小型捕鯨業について *Endangered Peoples of Southeast & East Asia* の一章で報告している。

核捕鯨者集団を構成する親方や乗組員は、捕鯨に関わる多様な作業やその責任を分担している。その中でも重要な役割を担っているのが親方と呼ばれる船主と、船上の責任者である砲手である。親方は核捕鯨者集団の経営上の責任者であり、船上の仕事に関わることは少ない。船の所有権は次の世代の男子に受け継がれ、網走のいずれのミンク船の場合も船の所有権を持つのは前任の親方の長男である。砲手は船の上で乗組員全員を統括する役割を果たしている。ある乗組員の話によれば：

砲手は船の皆に対し、大きな力を持っている。われわれがのろのろしていると、叩いたりしたものだ。

（フィールドノート 1986）

砲手の責任は鉾を打つだけではなく、捕鯨作業中のあらゆる決定において責任者の役割を果たす。つまり捕鯨作業の成功は砲手の能力にかかっていると言える。網走の砲手は本州、九州、四国などの伝統的な捕鯨地域の出身であり、子供の頃から捕鯨者の間で育つ過程で捕鯨に必要な様々な知識を学んできた。

ミンク船の他の乗組員は砲手ほどの重責を負わされてはいないが、捕鯨作業の成功には欠かせない役割を果たす。船長は航海に関する責任を負い、機関士は船の機械操縦を行う。甲板長、甲板員は砲手や船長を支え、特にクジラを捕獲後の解体作業は甲板員に任される⁸。まかないは船上での食事の準備をする。これらの職務は段階的に与えられ、捕鯨の未経験者はまかないから始めて、順番に重要な仕事へと昇進していく。

各乗組員に振り分けられた仕事の他に、全員が関わり合う重要な作業として、操業海域に着いてからの探鯨作業がある。クジラを探す方法はいたって単純であり、捕鯨者ひとりひとりが双眼鏡を用いて、視力を頼りにクジ

8 1986年当時、一部では船上解体が許されていた。現在は陸の鯨体処理場において、解体することが義務づけられている。

ラを探すのである。クジラを探すには高い視力が必要なだけでなく、適切な天候が要求される。探鯨作業は難しくまた重要な作業であるため、発見し捕獲したクジラに対し、それを見つけた人に現金を支給するなどの特典制度を設けている。しかし一頭目のクジラを捕獲した後で、そのクジラを解体している間に次のクジラを見つけた場合は、皆が均等に探鯨の機会がなかったことから、その報酬は全員で分けるなどの細かな取り決めがある。

核捕鯨者集団は捕鯨期間中、毎日の作業を通して仲間同士の連係は密である。それぞれの乗組員は毎朝早く船に集まり、まかないの用意する朝食を食べる。その日の天候を調べ、また海の状態を判断し、その日の捕鯨作業が可能かどうかを決める。気象条件が良くない場合は乗組員は船を去り、家へ帰る。条件が良い時には、朝6時ころには漁場へでかける（北海道新聞、1985年4月22日）。気象条件が整わなければ漁が出来ないことから、年間平均90日程しか捕鯨作業はできない。毎日の作業が終わると、船が網走を基地としている期間は家へ帰るが、船が他の港に停泊している場合には、乗組員は船に泊まる。このような密接した集団の日常生活を通して、核捕鯨者集団の連係はさらに強まる。親密な核捕鯨者集団の繋がりは捕鯨期間以外にも継続され、冠婚葬祭を中心とした交際や日常的な訪問を通して、核捕鯨者集団のメンバーは一年中、親密な関わりを維持している。

クジラの捕獲作業にたずさわる核捕鯨者集団の他に、クジラを市場へ送るまでの作業に関わる人々がいる。工場で働く人々、そして捕鯨事業所の事務員などが、クジラを船から降ろした後の様々な仕事の責任を負う。事務員は帳簿付けや販売などの作業を行い、親方の仕事を補足する。一方工

表2 網走における捕鯨共同体

家 族	ミンク船 1		ミンク船 2		家 族
	船主		船主		
	8 人の捕鯨 船乗組員	2 人の事務 員	8 人の捕鯨 船乗組員	2 人の事務 員	
6 人の解体 処理場担当 者		6 人の解体 処理場担当 者			

場の作業者はクジラを製品化する最後の過程で、クジラの箱詰めを行い、出荷の準備をする。工場での作業は高齢者に向いている事から、退職したもと捕鯨船乗組員がこの仕事につく場合が多い。

核捕鯨者集団の家族も同様に捕鯨共同体にとって重要である。その理由の一つは、家族は経済的に捕鯨共同体に依存していることであるが、さらに重要な理由は、家族がクジラを贈ったり（19 ページ参照）、食べたり（22 ページ参照）という行動や捕鯨に関わる信仰空間を共有していることである（23 ページ参照）。クジラの捕獲作業は核捕鯨者集団に限られ、男性のみにより行われる。さらに捕鯨者の妻達が捕鯨関連の仕事に加わるのは希である。一般に妻達は捕鯨とは関連の無い仕事につくことが多い。聞き取り調査の中で、ある捕鯨者はこのように述べている：

我々の妻達は捕鯨会社の工場では働かないし、船で働く事もない。不思議だが、他の家でも奥さんと旦那さんと一緒に働いているというのは聞かないね。

（フィールドノート 1986）

宗教や食文化などにおける妻の果たす役割は大きいが、一般的に捕鯨者とその妻達の間には、捕鯨活動と非捕鯨活動のような労働分業がみうけられる。

1986 年当時は、クジラ肉および加工品は網走を中心に北海道内ですべて消費されていた。クジラ製品の流通システムはその他の漁業製品とは異なり、地元の漁業共同組合を通さず直接に卸業者へ、さらに小売業者へと売られる。網走地区では小型捕鯨業者だけが、この形で生産物の流通を行っている。ゆえに卸業者と小売業者が核捕鯨共同体へ依存する度合いは高いと言える。

この章の結論として以下の事が言える。網走における捕鯨共同体は核捕鯨者集団、その家族、捕鯨工場従業者、事務員から成り立つ。核捕鯨者集団は捕鯨作業に従事し、工場従業者はクジラの製品化、事務員はクジラ製

品の流通を担当している。親方はクジラ捕獲から市場に出すまでの総責任者である。捕鯨共同体には捕鯨作業に直接関わる人々のほかに、宗教や贈答、クジラを基盤とした食文化を共有する家族が含まれる。捕鯨共同体のメンバーの役割はそれぞれに分担されており、さらに共同体の親密度は高い。小型捕鯨業に従事する人々とその家族は、網走市という行政区の中で、捕鯨業を基盤とした共同体を構成している。

5. 捕鯨共同体における捕鯨の社会・文化的役割

捕鯨共同体が捕鯨作業を通して労働活動、習慣、宗教を共有し、一つの共同体を構成している。ある捕鯨者の妻の話によると：

クジラ捕りはみんな家族みたいなものだった。うちのひとは砲手で、よく船に乗っている人たちの面倒をみていた。奥さん達も良く行き来したものだ。

(フィールドノート 1986)

共同体としてのつながりは、捕鯨業の世襲的特徴によって、さらに強められている。網走を基地とする一隻の船の捕鯨者の中に、かつての砲手の息子が2人いたり、またもう一隻の船の親方の兄弟が捕鯨船に乗っている、さらにいずれの船でも船主は父親から捕鯨業を受け継いでいることなどから、核捕鯨者集団の中に血縁関係があることは珍しくない。

捕鯨共同体は、捕鯨が果たす多様な社会・文化的機能を通して統合されている。それらの社会・文化的機能を：1) 修業制度、2) 贈与交換の習慣、3) クジラ食文化、4) クジラに関わる宗教的習慣に分類して、捕鯨共同体を統合している行事および行動規範を検証する。

5.1 修業制度

捕鯨共同体の中心となる核捕鯨者集団は、捕鯨者として成長する過程の

修業制度を通して統合されている。つまり捕鯨を志す若者が豊富な経験を持つ捕鯨者から捕鯨技術指導を受けることにより、しだいに捕鯨船乗組員として認められていく。ある砲手の説明によると：

私が育った所が捕鯨の町で、網走に来て小型の船に乗り、最初は甲板員として働いた。3年経って甲板長にしてもらった。それから10年小型船で働いて、それから砲手になった。

（フィールドノート 1986）

捕鯨に従事するまでの長い修業過程は子供の頃から始まる。子供たちは捕鯨者の間で捕鯨に関する知識を得ながら社会化し、時には港に停泊している捕鯨船に乗り、乗組員と食事をしたりする。2人の息子が共に捕鯨船に乗っているもと砲手の妻は、2人の息子達が幼い頃の事を思い出して次のように語る：

今、捕鯨船に乗っている2人の息子は子供の頃から、父さんの船に遊びに行くのが好きだった。2人で船のまわりでいつまでもいつまでも遊んでいたものだった。父さんみたいなクジラ捕りになるのが夢だったね。

（フィールドノート 1986）

子供が捕鯨者の間で社会化して行く過程で受ける影響は大きく、ゆえに優秀な捕鯨従事者が捕鯨の家系の出身者である事が多い。つまり捕鯨者を家族に持つ者の中から、優秀なクジラ捕りが育っていく事が多くある。

捕鯨修業の次の段階は捕鯨船に乗ってから始まる。最初はまかないとして雇われる、2・3年まかないとして働く間に、指導者と見習いの関係を作り上げる。この過程を「血縁を作る」（フィールドノート 1986）といい、クジラ捕りとして最初に行う修業である。核捕鯨者集団は必ずしも血縁関係を持っているわけではないが、明らかに血縁に似た親密な関係で結ばれ

ている。

若い者が捕鯨をやると思うと、まずまかないから始めて。最低2年くらい皆にご飯を作って、船の皆に認められたら次っていう順番だが、砲手は才能がなければできないから、それは例外だ。

(フィールドノート 1986)

捕鯨船に乗り、疑似血縁関係集団の一員として受け入れられれば、その人は先輩の捕鯨者から技術訓練を受ける事が出来る。そして修業の過程で、より責任のある仕事を任せられるようになるが、その昇進は砲手、船長、そして親方を含めての同意の元に決定される。この決定により修業中の者の能力が評価され、その結果、その能力に適した仕事へと配属される⁹。

捕鯨者になるための長い修業に加えて、捕鯨修業者が砲手になるには、緊張の中でタイミング良く銚を打つことが出来る天賦の才能が必要とされる。その上砲手は捕鯨作業全体を指揮し、船員をリードする事ができる優れた指導力の持ち主でなければならない。これらの条件を備えた人々が、その能力を認められ、砲手となっていく。実際の捕鯨作業の中では、砲手の能力がかなりの部分、漁の成功を決定する。

核捕鯨者集団は伝統網捕り捕鯨の時代には、鯨組として知られた。網捕り捕鯨に要求される技術が複雑なことや、捕鯨作業に関る人の数が多いことなどから、当時の鯨組は修業制度や行動規範などが厳しく管理されていた(福本 1978)。網走における小型捕鯨のような近代捕鯨においても、同様な社会規範が存在し、それにより核捕鯨者集団の統合がなされている。老捕鯨者の話によれば：

9 捕鯨業を営む人々の数が減少してしまった1986年頃の状況は異なっており、この地域には小型捕鯨船が2隻しかない事から、個人の能力よりは、仕事の空きがあるかどうかの方が重要な要因である。

クジラ捕りはいい人ばかりだ。我々がやって良い事と悪い事を教える。
あんまり酒を飲みすぎる者がいれば、船を降りれと言う。そんな奴は
船には要らないからね。

（フィールドノート 1986）

捕鯨者の間に発達した修業制度や行動規範により、核捕鯨者集団は統合され、その連帯はさらに強化されている。

5.2 贈与交換の習慣

捕鯨共同体では一年を通し、複雑な贈与交換が見られる。贈与品として多様な品物に混じりクジラ肉や脂が贈られ、捕鯨共同体の中、さらに友人、隣人を含む捕鯨共同体外との互酬的な贈与交換制度が維持されている。クジラを用いた贈与交換制度は、日常の贈答と季節ごとの贈答の2種類に分けることができる。それを以下の図1に現した。捕鯨共同体を中心として、個人的友人や近所の人々、親戚、および仕事上の関係者へ、より形式化した季節的な贈答品の交換が行われる。その場合は主にクジラ製品が捕鯨共

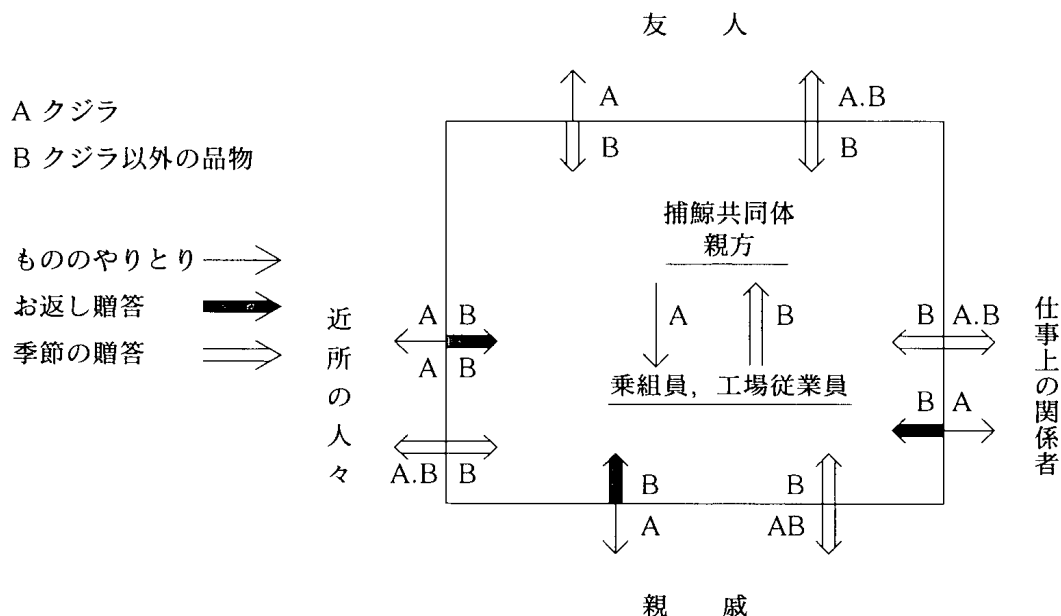


図1 捕鯨共同体における互酬的贈与交換の習慣

同体から外へと贈られ、その返礼として、クジラ以外の物品が贈られる、あるいは外から捕鯨共同体への季節の贈答が行われ、その返礼として捕鯨共同体からはクジラが贈られる。

形式化されない日常の非商業的流通、つまりもののやりとり¹⁰として捕鯨共同体と外との間で、クジラとクジラ以外の品物が互酬的に交換されている。捕鯨共同体から外へは、主にクジラが贈られ、その返礼としてクジラ以外の物品が贈られる。また捕鯨共同体の中でも、捕鯨船の乗組員や鯨体処理場で働く人々などから、船主への季節の贈り物が贈られ、その逆の方向に、より日常的なクジラの分配が行われている。

捕鯨者と解体処理場に働く人々は給料の他に、新鮮なクジラ肉と脂、さらに工芸品を作るためのクジラの髭を受け取る。親方の話によれば、クジラが捕れる毎にクジラ肉と脂の一塊を捕鯨者と工場従業員に分配するのが習慣であるという：

船によりやり方は違うが、これは我々のしきたりで、その日のクジラを皆で分けるんだ。クジラ捕りが自分達が捕った物を貰うのは当然だからね。工場の人たちも生のクジラが手に入るから工場で働くという人が殆どだから、工場の人もちろんクジラを持って帰る。もし友人にあげる場合は、俺に言えばもっと分けてやるんです。欲しいだけ持っていってもらいます。

(フィールドノート 1986)

クジラ肉の日常のやりとりは興味深いパターンを示している。クジラ肉と脂は第一に捕鯨共同体に分配され、その後共同体の外側へと流通して行く。日常の贈答は捕鯨共同体の人間関係の調和をとる役割を果たし、さらに外部との互酬的贈与交換を活発化している。捕鯨関係者以外の人たちの

10 ペフ・ハルミ(1984)は贈与交換を形式化された「贈答」と、日常的な「もののやりとり」と分けていることから、ここでもその分類を用いている。

話によると：

捕鯨の季節に近所からいただく生のクジラは有り難いね。たくさん貰った時には近所にも分けてあげられる。もちろんお返しはするがね。たとえば採りたてのリンゴだとか、俺が釣った魚とかね。

（フィールドノート 1986）

上記のやりとりには受け取った相手が贈答品を返しているが、他の場合には物質としての贈答品は返されない場合もある。例えば、子供の野球チームのコーチが息子を迎えに来ると、父である捕鯨者は新鮮なクジラを持たせたりする。この場合、野球コーチは贈物を返すことは期待されず、代わりに息子の面倒をみる事が期待されている。さらにこれらの贈与品は二次的にやりとりされることもあり、贈答を受け取った人々が、贈答品を近所に住む人々等に贈ることがある。

日常のもののやりとりに対して、より形式化されたクジラ肉の贈与が季節ごとの贈答に見られる。このような贈与交換には現金が介在する事が多くあり、人々はクジラ肉や脂を商店や親方から買い求めて、それをさらに季節の贈与交換に用いる。捕鯨共同体から外部への贈答品として、クジラ肉や脂は最も好まれる品物である。例えば捕鯨共同体のメンバーは歳暮や中元として、クジラ肉や塩漬けした脂を贈ることが期待されている。そのお返しとして、捕鯨共同体の外部の人々はクジラ以外の品物を贈る。その例として以下のような形の贈答がみられる：

余市ではクジラ汁をお正月に食べるんですが、そこに住むうちの親戚は毎年、私が塩漬けのクジラ脂を贈るのを待っているんです。船に乗っている息子に頼んで、親方から少し買ってもらい、その親戚に贈ります。

（フィールドノート 1986）

ある親方は毎年、赤肉（クジラ肉）と白肉（脂）を箱に詰めて、歳暮と中元に親戚に贈るのが習慣であるという。赤と白という喜びを象徴する色あわせによって、贈与交換に特別の意味を込めている。季節の贈答は、人々及び集団の間を結び付ける関係を強化する働きをする。例えば捕鯨者が社会関係において重要な存在であると考えられる親戚の人々に、季節の贈答をしたり、また関係を強化しておきたい存在である親方に歳暮を贈る。また仕事の上での友人に対して季節の贈答をする事により、仕事上で受けた利益に対して感謝の気持ちを表す事もある。

捕鯨共同体の中やさらには外との繋がり強化において、日常のもののやりとりと季節ごとの贈与交換が重要である事が明らかになった。日常のもののやりとりは単に捕獲した物を分かち合うという形式化されない形で行われ、日常のやりとりに含まれる人々は、血縁関係は重要ではなく、むしろ親密度、距離などが決定的要素と見られる。一方季節ごとの贈与交換は、この地域における重要な互酬的贈与交換制度であり、クジラ肉と脂は地域の人々に好まれることから、贈与交換の流れを円滑にする役割を果たしている（伊藤 1995）。

5.3 クジラ食文化

日本中が第二次世界大戦中の経済不均衡から生じた食料不足に喘いでいた1930年代から1960年代にかけて、網走地方ではクジラが重要な食料資源であった。その頃を記憶している人々は「クジラがなかったら、たくさんの方が餓死していただろう」（フィールドノート 1986）と言う。その当時、クジラのほとんどの部分が食料・生活資源として使われていた。クジラ脂が照明や料理用、または石鹼の材料として利用された。靴や鞆はクジラの皮を材料とし、クジラの腸はテニスラケットを作るのに使われた。言うまでもなく、クジラ肉は毎日の食事に欠かせなかった。その当時に出版されたクジラ料理を紹介する本「北海道の水産製品の見分け方とその食べ方」（北海道漁業組合連合会 1955）の中で、10通りのクジラ料理方法が紹介されている。

クジラ汁	—クジラ脂と野菜を煮た汁
クジラ粕汁	—クジラ脂と野菜に酒粕を入れた汁
クジラ味噌煮	—味噌で煮たクジラ肉
クジラカレー	—クジラ肉のカレー
クジラこみあげ	—クジラ肉の生姜揚げ
クジラ柳川漬	—クジラ肉の漬物
クジラ味噌漬	—ゆでたクジラ肉の味噌漬
さらしクジラ	—スライスしたクジラの尾のからし漬
いりかわ味噌汁	—油をとった後のクジラ脂の味噌汁
いりかわおでん	—油をとった後のクジラ脂のおでん

1960 年以降食料不足が緩和され、他の肉が市場に出回り始め、しだいにクジラの人気も下がって行ったものの、網走地方ではクジラ肉及び脂は、日常の食材として、また正月などの儀礼用の食材として好まれている。網走における 1986 年頃のクジラ料理の特徴は、生のクジラと塩蔵したクジラ脂である。多くのクジラ肉が刺し身として生で食べられていたが、最も味が良いとされる「おのみ」は寿司のねたとして珍重され、またクジラのベーコンやさらしクジラも好まれていた。クジラ脂は古くから塩漬けされ保存され、正月のクジラ汁のような儀礼食の材料として用いられた。クジラ汁は北海道各地で見られ、特に正月には縁起物として好まれた。ある捕鯨者はクジラ料理の味をこのように表現した：

クジラを食べ飽きる事はないね。クジラの味をどんな風に表現しようか。クジラの味には人を引き付ける暖かさがあるんだ。クジラには微妙な味があってね。

（フィールドノート 1986）

5.4 クジラに関わる宗教的習慣

日常生活の中で自然と関わり合いを持つ人々は、同時に自然界の霊的世

界とも関与する。自然界に依存している日本の漁業者は「わだつみ」と呼ぶ海の神との深い関わりを創りあげてきた(亀山 1985)。地域によりまた個人により、「わだつみ」は様々な形態を持つ。しかし「わだつみ」と呼ばれる海を支配する自然の力に対する敬意、怖れ、そして信頼感は日本中どここの漁業者にも共通して見られる。網走の捕鯨者もその例外ではない。霊の世界との頻繁な対話は、捕鯨者やその妻達にとり重要と考えられている。砲手の妻の話によると：

昔はよく神社やコンコンさんへ頼み事をしに行ったものだった。うちの父さんはしばらくクジラを捕っていなければ、神社へ行って頼んだし、クジラが捕ればお礼を言いにもまた行ったものだった。神様がクジラを捕らせてくれるんだから、感謝だね。

(フィールドノート 1986)

ここで言われている神様とは、夫が働く海を支配する霊的力である。上記の話で明らかのように、捕鯨共同体のメンバーは宗教的習慣を守ることが捕鯨活動に大きな影響を及ぼすという事を信じている。ゆえに儀礼を行う事により、捕鯨共同体と霊的世界との健全な関係を維持しようとする。若い捕鯨者の間でも、日常的に神や仏を拝むと言う：

鯨が捕れない時、いや通常でも必ず神棚を拝み、船の上でもあずきご飯などは欠かさない。漁に出る朝は、必ず神棚に水をあげて、家を出る。

(フィールドノート 1987)

いつもは漁にでる直前に神棚を拝むことにしている。その後、父、母、兄を毎朝拝んでいる。網走に船が入っている時は、必ず、毎朝自分で拝むけど、他の港に入る時は家にいる家内に、それを任せる。

(フィールドノート 1987)

優秀な砲手であった亡き夫を、その妻は信仰深い人であったと言う：

とっても信心深くてね、神様も仏様も拝んでいたね。それから縁起を
かついだし、迷信も信じて、それは厳しかった。

（フィールドノート 1986）

上記の引用に現れている感情は、網走の捕鯨者に見られる宗教観の典型である。一見、混沌としているようであるが、この宗教観の根底にあるのは自然とその支配力に対する敬意と恐れである。これらの力は「神と仏」という言葉で表されている。「神と仏」は1つの概念の2つの側面であり、自然を支配する力を指す。この中には先祖崇拝、海上交通の神、自然の中にある特定のものを司る神などの多くの下位区分がある。仏壇に置かれた御札や仏像、クジラの霊を慰める碑などを通して、人々はこれを「神と仏」として拝んでいる。

捕鯨活動は個人あるいは集団で行われる宗教儀礼と深く関連している。捕鯨シーズンの始めには親方と乗組員が集まり、船の上で神式の儀礼が行われる。そこで神主は船と捕鯨者を浄める。神主は船の神棚に御札を納め、船と捕鯨者の安全、また豊漁を祈る。この儀礼の中で捕鯨者は榊、塩、米、水を神に捧げる。捕鯨シーズンの始まりを印すこの儀礼は、捕鯨者が神とのつながりを強めることにより、捕鯨活動を始める霊的、あるいは精神的な準備をするという意味において重要である。捕鯨作業が始まると、捕鯨者とその妻達は個々に船の上や家で、神や仏を拝む。船の神棚には塩と生の米がいつも上げられている。かつては週に一度は小豆ご飯を炊き、感謝の気持ちを込めて神様に捧げた。クジラが捕れると尾の端3センチ程を神棚にあげ、神に捧げている。親方の話によると：

クジラが捕れた事を神様に感謝して、クジラの尾を切って捧げます。
これは必ずする事です。

（フィールドノート 1986）

捕鯨者の家には仏壇と神棚があり、その両方に捧げ物をして祈る。中には仏壇にクジラの霊を慰めるために、「鯨の魂、南無妙法蓮華經、○家」と書いた一片の紙を仏壇に納めている捕鯨者もいる。捕鯨者は家の仏壇に向かいクジラの魂が成仏するように経をあげたり、時によっては地元の神社や寺へ行き、祈ったり経をあげたりする。神仏を拝むという宗教的習慣には、女性も深く関わっている。その表れの一例として、捕鯨者の妻が地元の神社へ行き、クジラを捕らせて下さいと祈る場合などがある。

もう一つの重要な儀礼が捕鯨期間の終わりに行われる。過去には捕鯨者が寺に集まり、そのシーズンに捕ったクジラの魂を慰める儀式をおこなった。現在は集団よりは個人で、この儀式を行う場合が多いが、過去には親方が函館へ行き、寺にあるクジラの魂碑の前で行われる鎮魂式に参列した事もある。聞き取りをした砲手は、「神と仏」への敬意と怖れがなくてはクジラを捕れないと言う。

捕鯨者は神の罰を恐れ、禁忌を守る。しかし若い捕鯨者に比較すると、高齢の捕鯨者の方がはるかに信心深く、「若いクジラ捕りはこんな事は知りもしないだろうな」と言う。聞き取りの中では、捕鯨者は漁に悪い影響を与える事を懸念して、女性を捕鯨作業を行う現場から遠ざけるなどの禁忌が多く聞かれた。例えば捕鯨作業が行われている時は女性が捕鯨船に同乗する事は好まれず、高齢の捕鯨者であると停泊中であっても、船に乗ってくる女性に対して神経質になるという。ある砲手の話によると：

俺が若かった頃は船に載ってくる女の人、みんなに生理中かどうか聞いたもんだ。船の年寄りがそういう事にはうるさかったからね。

(フィールドノート 1986)

女性に関わる禁忌として、捕鯨者が出産に立ち会う事を避けるという習慣がある。たまたま妻が出産しているときに捕鯨者が同じ家に居合わせたとすると、それからしばらくの間、生まれた子が女の子であれば一週間、男の子であれば三日間、その人は船に戻る事が許されない。これらの女性

に関わる禁忌は、他の漁業者の間にも良く見られる。これは漁船の神は女神なので、女性が船にのるとやきもちを焼くのだと捕鯨者は説明する。現在の捕鯨者は以前ほど女性に対する禁忌を厳しく守るわけではないが、今でも女性、たとえ女性研究者でも、捕鯨作業に同行する事を喜ばない。

言葉に関する禁忌も守られている。猫に関する話や、牛やへびに関する話、特に明け方にサルの話しをする事も悪いとされている。高齢の捕鯨者はそのような禁忌が破られると、捕鯨へ出る事を拒否することもあった。ある捕鯨者の話によると：

他の人の船に乗っている時は特に気をつけないとならない。人の船を汚す事は出来ないからね。

（フィールドノート 1986）

船の上でナイフを落とす事も縁起が悪いとされている。しかしその場合はナイフの上に塩をまいて、それから拾うと良いとされている。砲手である夫について、その妻はこのように話してくれた：

うちのひとは家にいるときでもナイフに塩を撒く事はきちんと守った。家でもとても信心深かった。

（フィールドノート 1986）

捕鯨共同体における宗教的習慣は解りにくく、非論理的と見られる事もある。しかし捕鯨者とその妻達は、日本の漁業者に共通してみられる自然界の崇高な存在である「神と仏」との健全なつながりを持つとする宗教的習慣を守っている。

6. 水平的統合と垂直的統合

網走における小型捕鯨従事者とその家族は捕鯨業という生産活動を通し

て、社会・文化的機能によって結び付けられた捕鯨共同体を構成している。これらの社会・文化・経済機能は、共同体の集団としての連体を強め、統合している。また捕鯨共同体の外との贈与交換や宗教的習慣などは、共同体と地域社会や精神世界とをむすびつける重要な社会・文化的役割を果たしている。小型捕鯨共同体を結び付けている統合形態を大きく2つに分類することができる：1) 捕鯨共同体の中、さらに共同体と外とを結び付ける統合性、2) 捕鯨共同体と精神世界とを結びつける統合性。この2つの統合性は言い換えると「水平的統合」と「垂直的統合」とも呼ぶことができる。「水平的統合」とは捕鯨共同体の中の人々を結びつける力であり、またその共同体を地域と結びつける力を指す。一方「垂直的統合」とは捕鯨共同体と「神や仏」などに代表される精神世界とを結びつける機能を指す。これらの2つの統合を図に表すと以下のようなになる。

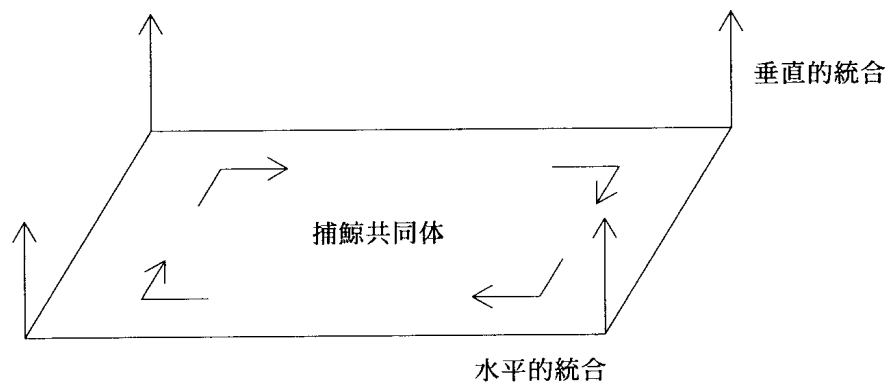


図2 社会・文化的活動にみられる2つの統合性

水平的統合は形式的、および日常的な贈与交換、捕鯨に関わる多様な共同作業、日常的な交流、さらに社会・文化的に重要な食文化を共有することなどを通して行われる。一方垂直的統合は宗教的行事や儀礼を行うことを通して、人間の力では及ばない神や仏の世界へのつながりを確立し、また維持している。禁忌を守るということも垂直的統合の一例であり、この行為を通して、個人が人間の力を超えた精神世界との健全な関係を維持する。多種の漁業が行われている網走において、小型捕鯨業を基盤とする

捕鯨共同体が確立し、その共同体はクジラを捕るという作業に関わる社会・文化・経済的機能により統合されている。

7. おわりに

1986年から数年にわたりに行った聞き取り調査をもとに、商業捕鯨モラトリウム以前の網走における小型捕鯨共同体を検証した。核捕鯨者集団、それを取り巻く家族や、その他の関係者を含む捕鯨共同体、さらに共同体とその外の人々との関わりにおいて、捕鯨を基盤とした親密な社会・文化的機能が認められた。さらに捕鯨に関わる多様な社会・文化・経済的制度は捕鯨共同体を統合し、維持する役割を果たしている。

網走の小型捕鯨がモラトリウムのもとでミンククジラの捕獲枠を失ってから、16年の歳月が流れた。その間、小型捕鯨の船主たち、日本政府、数多くの研究者たちが国際捕鯨委員会において、日本の小型捕鯨の社会・文化的重要性を訴えてきた。2002年の国際捕鯨委員会において、日本政府は1988年以来要求している日本の小型捕鯨のミンククジラ捕獲枠を再度要求したが、その要求はまたもや拒否された。網走地域の捕鯨文化継承への道のりがまた一歩遠のいた。しかし地域の人々のミンク漁再開への希望は強い(日本テレビ 2002年11月放映；フィールドノート 2002)。1986年当時、網走において筆者が行なった聞き取り調査の際、重要な協力者であった三好船主が昨年亡くなられた。故三好船主は小型捕鯨が網走の町の活力であった時代を生き、その後モラトリウムが発効された以降の苦難の時代を経験された。同氏が願ったように、網走沖でミンク船がクジラを追う日が来ること確信し、その日が早く訪れる事を祈りつつ本稿を閉じる。

文献表

網走市

1971『捕鯨史の沿革』

明石喜一

1910『明治期日本捕鯨誌』東洋捕鯨株式会社(1989年マツイ書店より復刻版)

秋道智弥

1994『クジラとヒトの民俗誌』東京：東京大学出版

フリーマン, M.R. ミルトン, 他

1989『くじらの文化人類学：日本の小型沿岸捕鯨』東京：海鳴社

福本和夫

1978『日本捕鯨史話』東京：法政大学出版

福山順一

1943『捕鯨の先覚者』大阪：日本出版

ベフ・ハルミ

1984「文化的概念としての贈答の考察」(伊藤幹治編)『日本人の贈答』pp. 18-44, 東京：ミネルヴァ書房

北海道庁

1957『北海道漁業史』

1985『漁業センサス』

北海道漁業協同組合連合会

1955『北海道水産製品の見分け方とその食べ方』

北海道新聞

1985年4月22日

1987『北海道年鑑』

北水協会

1977『北海道漁業志稿』東京：国書刊行会

1984『北水協会百史』東京：国書刊行会

板橋守邦

1989『北の捕鯨記』札幌：北海道新聞社

伊藤幹治

1995『贈与交換の人類学』東京：筑摩書房

Iwasaki, Masami.

1988 *Cultural Significance of Whaling in a Whaling Community in Abashiri*, Master Thesis submitted to University of Alberta.

Iwasaki-Goodman Masami & Milton M.R. Freeman

1994 "Social and Cultural Significance of Whaling in Contemporary

Japan: A Case Study of Small-type Coastal Whaling” In *Key Issues in Hunter-Gatherer Research* ed. By Burch & Ellanna: 357-376. Oxford: Berg

岩崎・グッドマンまさみ

1997「北部ノルウエーにおける小型捕鯨業の発展と内発的発展モデルの応用」第11回北方民族文化シンポジウム報告：pp. 51-64

Iwasaki-Goodman, Masami and Masahiro Nomoto

1999 “The Ainu on Whales and Whaling” In *Spirit of a Northern People*. Ed. By W.W. Fitzhugh, pp. 222-226. Washington D. C.: National Museum of Natural History Smithsonian Institution.

Iwasaki-Goodman, Masami

2000 “The Ayukawa-hama Community of Japan” In *Endangered Peoples of Southeast and East Asia*, ed. By L.E. Sponsel, pp. 69-89. Westport: Greenwood Press.

岩崎・グッドマンまさみ，野本正博，藤島法仁

2000「アイヌ民族のクジラ利用文化」『鯨研通信』第406号，pp. 10-17，財団法人日本鯨類研究所

岩崎まさみ

2002「アイヌ民族クジラ利用文化の足跡をたどる」『人文論集』第21号，pp. 111-146

亀山慶一

1985「わだつみの神 竜宮の世界」『日本人の原風景2』大林太良・他編 pp. 83-92. 東京：旺文社

金成英雄

1983『房総の捕鯨』東京：嶺書房

萱野茂

1980『おれの二風谷』東京：すずさわ書店

小型捕鯨協会

2002 [www//homepage2.nifty.com/jstwa](http://homepage2.nifty.com/jstwa)

河野広道

1958「捕鯨」『北海道の風物詩』楡金幸三編，p. 90，札幌：楡書房

森田勝昭

1994『鯨と捕鯨の文化史』名古屋：名古屋大学出版会

中村春江

1985『北海道で鯨を捕った男』東京：あすなろ社

名取武光

1940「噴火湾のアイヌの捕鯨」『北海道文化研究報告』3, pp. 137-161

日本政府

1997 *Papers on Japanese Small-type Coastal Whaling, Submitted by the Government of Japan to IWC 1986-1996*

日本テレビ 2002年11月放映

スーパーテレビ「巨大クジラを撃て！」

西本豊弘, 他

1985「動物学」『考古学』11号, pp. 91-95

大井晴男

1982『シンポジウム：オホーツク文化の諸問題』東京：学生社

更科源蔵

1955『コタン探訪張』（調査ノート）

1976『コタンの生物記II』東京：法大出版

多藤省徳

1985『捕鯨の歴史と資料』東京：水産社

宇田川洋

1979a『北海道の考古学I』札幌：北海道出版企画センター

1979b『北海道の考古学II』札幌：北海道出版企画センター

米村喜男衛

1981『北方民族誌2』札幌：北海道出版企画センター

渡部裕

1992「アイヌの海獣狩猟」『北海道北方民族博物館研究紀要』第1号, pp. 53-76

1993「蝦夷地における動物名称の認識とアイヌの生業」『北海道北方民族博物館研究紀要』第2号, pp. 45-58

1994a「北東アジアにおける海獣狩猟(I)」『北海道北方民族博物館研究紀要』第3号, pp. 61-82

1994b「環オホーツク海の家獣狩猟文化」『環オホーツク海文化のつどい報告書』No.2, pp. 76-82

1995「北東アジアにおける海獣狩猟(II)」『北海道北方民族博物館研究紀要』第4号, pp. 65-86

小型捕鯨の文化人類学的考察(1)：網走捕鯨共同体のケース（岩崎）

山田秀三

1984 『北海道の地名』札幌：北海道新聞社